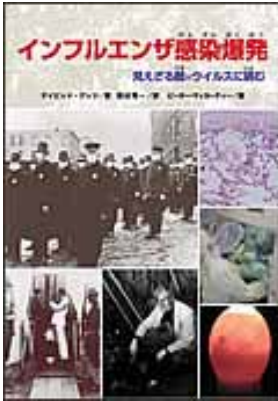


インフルエンザ感染爆発 - 見えざる敵=ウイルスに挑む -

ノンフィクション知られざる世界

デイビッド・グッツ/著 西村秀一/訳 ビーター・マッカーティー/画

金の星社 2005年12月 1300円



今回の新型インフルエンザ騒動で、インフルエンザって、そんなに怖いのか？と思った人も多いのではないのでしょうか。インフルエンザウイルスについて知りたい人は、本書を読んでみてください。

1918年、第一次世界大戦のさなかに世界的に大流行したインフルエンザでは、世界中で20億人ものが感染したそうです(その当時の地球の人口と同じです!)。大戦中に死亡したアメリカ人兵士の実に8割以上が、戦場ではなくインフルエンザで命を落としたといえます。世界中で亡くなった人は約5000万人、日本でも39万人が亡くなったのです。たかがインフルエンザで？そうです。あまりにも次々と人が亡くなるので、墓を掘るのも間に合わず、どこに埋葬されたのかもわからなくなるほどでした。人ごみで感染しないように、学校も、映画館や酒場なども閉鎖されました。町がまさしくゴーストタウンになったのです。

インフルエンザはウイルスによって引き起こされます。ウイルスは年々少しずつ変化しますが、たまたまウイルスの構造に大きな変化があると、そのウイルスの免疫を誰も持っていないので大流

行になってしまうのだそうです。1918年当時はまだウイルスというものが発見されておらず、病原体を探す努力は成功しませんでした。したがってそのとき猛威をふるったのがどのようなウイルスだったのかがわかりません。再びそのウイルスが息を吹き返したら、現在の地球の人口と飛行機での人々の移動を考えると、1918年とは比べ物にならないほど大きな被害が起こる可能性があります。何とかその時のウイルスを調べないと、、、。そのような思いで、研究者は必死に当時のウイルス探しを始めました。当時のウイルスが今でもそのまま残っているのはどこか？と考えて、なんとアラスカの凍土に埋められた遺体を掘り起こしてまで、ウイルス探しをしたのです。そして2005年10月、当時のウイルスの全遺伝子情報が解読されました。

今回のインフルエンザウイルスは弱毒性で、前回ほど大きな被害を及ぼすことはなさそうで、ホッとしています。でも今回は大丈夫だったということが、「今後も大丈夫」ということとは違います。今回の教訓をうまく生かして、今後も大丈夫な体制や体制作りを進めていってほしいと思います。

同時に、ウイルス解明の結果が今回の対策にどのように役に立ったのか、非常に興味あるところです。